

アドベンチャークラブとその活動

外国語学部国際文化交流学科 齋藤 葵

ほとんどの人が、旅行に出かけたことがあるでしょう。しかし「冒険に行く」という人はあまり見かけないと思います。私は神奈川県に入学してから、部活で冒険をするようになりました。部活の名を「アドベンチャークラブ」といい、冒険をすることを目的とした部活動です。今回、アドベンチャークラブは何をする部活か、私ができるような冒険をしてきたのかを紹介したいと思います。

アドベンチャークラブについて

アドベンチャークラブ（通称アドベン）は、今年で創部44年目になり、約2000人の部員を輩出してきました。主な活動内容は冒険ですが、部活内では冒険のことを活動と呼びます。活動は、大きく4つに分けることができます。まず1つ目は、年に数回行われるラフティング

の大会です。そのなかの1つが「リバーベンチャー」といい、神奈川県アドベンチャークラブが主体となって作り上げたラフティングの大会です。今では他大学の冒険部が参加し、大きな大会になりました。選手になっている部員はこの大会で勝つために、週末を利用し、相模川などで練習を行います。2つ目は、新入生歓迎合宿です。毎年、ゴールデンウィーク頃に新入生と一緒に合宿に行きます。私が1年生の時は、富士山でケイビングをしました。この合宿にはOB、OGが参加するため、交流しながら先輩方の活動を学ぶことができます。3つ目は、週末活動です。週末活動というのは、個人が週末に活動計画を立て、冒険に行くといったものです。ラフティングの練習や、ケイビング、トレッキング、サイクリング、ウォーキング、おいしい物探索など、さまざまな活動があります。

4つ目は、アドベンチャークラブで最も大きな春活動と夏活動です。これは夏休みや春休みの長期休みを利用し、冒険に行くものです。1人で行ったり、数人で一つのグループを作り、活動の計画をして、国内または海外に行きます。特に、3年生にとっての夏活動は現役最後の活動になるので、重要視されています。では、実際にアドベンチャークラブがどんな冒険を行っているのでしょうか？

- 2009年夏活動を見ながら、紹介します。今回の活動は5種類ありました。
- 一、南米にある天使の窓と言われている洞窟にある穴を見に行くグループ
 - 二、北欧を自転車で行くグループ
 - 三、釧路川を上流から海まで漕ぎきるグループ
 - 四、北海道と西表島を自転車と徒歩で横断する

グループ

五、自分と同名同名の人を自転車で行く

グループ

以上の五種類です。

活動を行う際、各グループは活動の最終目標を持って活動します。前述の一、で例をあげると、南米にある天使の窓と言われている洞窟にある穴を見ることが目標になります。目標達成できなかつた場合は活動失敗になるので、部員は真剣に活動に取り組みます。

しかし、このような長期活動は計画を立てたからといってすぐ行けるわけではありません。合同部会を開き、顧問の先生やOB、OG、部員の前で、活動を行う各グループがプレゼンテーションを行い、1つ1つの活動をチェックします。特に重点的にチェックすることは、治安、医療、安全対策です。不備がある場合は、計画を最初から作り直します。または書類を再提出します。この合同部会で活動企画が通らなければ、活動に行くことはできません。また、日本に残った部員は在京連絡システムを作り、部員の安全や位置確認を行います。以上のように私たちが活動、冒険と考えているものは、安全に気を配りながらも、今まで経験した事がない活

動をし、目標を立てて、その目標を達成させることです。

活動中は具体的に何をしているのかを、私が経験したことを通して紹介します。私は今までに2つの活動に行きました。1つは中国沿岸部を自転車での横断する活動。もう一つはパラオ共和国の戦跡をすべて歩いて見て回る活動です。

中国での活動

まず中国での活動名を考えました。

「ママー！チャリで中国行って来る！」という活動名を立て、文字通りママチャリで青島から上海までの、約800キロメートルを部員5人で走りました。

8月上旬、青春18切符で鈍行列車に乗り、1日半かけて横浜から下関まで行きました。そこからフェリーに乗り、青島から中国に入国しました。青島で安宿を探し、そこを拠点に活動の準備をします。最初の5日間を自転車購入などの支度に費やし、その後、活動開始です。中国は国道を少し離れると舗装した道路が無いのでとても走りづらく、標識も少なく、中国語で書かれているので、何度か迷いました。また、急に強い雷雨になったと思いきや、むせ返るほど

暑くなったこともありました。

いろいろ、経験したなかでも一番困ったのは、国道が水没していたことと警察にパスポートを没収されかけたことです。水没していた国道を避けるために、回り道をしました。その結果、道に迷い、ほぼ休憩なしで1日走り続けました。80キロメートルは走ったと思います。中国にはレストランと宿はどこ町にでもあるので、迷いましたが小さな農村に宿泊することにしました。しかし、あまりにも田舎のため、その宿には外国人が来たことがなかったらしく、中国人と間違われ、身元確認のために中国人証明カード（日本で言う住民基本台帳カードのようなもの）の提出を求められました。しかし、私たちは、中国語もあまり分からない上に、カードの事も知らなかつたので大学の学生証とパスポートを出すと、宿の主人が外に出て行ってしまいました。数分後、主人はランニングシャツに短パン姿の、自称警察官の中年男性を連れて戻って来ました。その中年男性は私たちのパスポートを持って行ってしまいました。どう見ても警察官には見えないその人にパスポートを持って行かれ、私達は真っ青になり急いで交番に駆け込むと、その人が居ました。本当に警察官だったようで、私たちが日本人であること、日本に

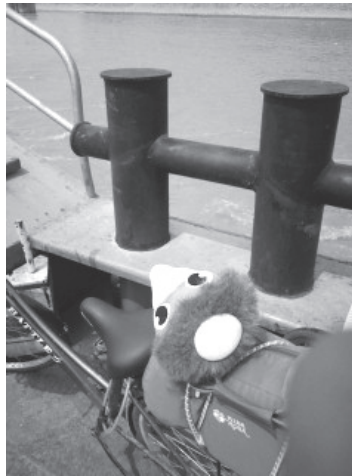
は中国のような日本人証明カードがないこと、提出したのはただの学生証であることを説明すると、パスポートを返却してくれました。また、中国人証明カードのことについても説明してくれました。パスポートが返って来たときの安堵感は、今でも忘れられません。

他にも蟻が湧き出るベッドでの睡眠や、ひったくりにも遭いました。謎の虫を食べておなかを壊すこともありましたが、食事はおいしいものがほとんどでした。その中でも、中国の朝ご飯が大好きでした。朝になるとたくさんの露店が道路に並び、肉まん、ラーメン、おかゆ、豆乳、蒸し物を売っています。

このようにいろいろありましたが、1ヶ月間中国を疾走し、目的地の上海に到着して、ビールかけをした時は最高でした。毎日ハプニングだらけでしたが、きれいな景色やおいしい料理を楽しんだこと、中国人と交流できたことは、今でもいい思い出です。



中国、上海でのゴール時



中国、長江横断時



中国の日の出

パラオでの活動

次にパラオの活動について紹介します。活動名は「Fuiyama Geisha Project in Palau」というもので、活動内容は芸者の格好をして、旧日本軍がパラオに残した戦跡を、1週間ですべて歩いて訪ねることです。これは私にとって、現役最後の活動だったので、一人で計画を立て、活動をしてきました。

まずパラオについてお話しします。パラオは正式名をパラオ共和国といい、太平洋の真ん中にあり、たくさんの島々からなる国です。主な資源は、海産物とダイビングなどの観光資源です。現代の日本人からするとパラオはあまり有名な国ではありませんが、第二次世界大戦前まで日本はパラオを統治していました。その結果、パラオ語のいくつかは日本語が語源と言われています。

例えば、「オベントウ」はお弁当、「ツカレナオス（パラオ語での発音）」はビールを飲むことを意味します。戦中は日本の大きな軍事基地や、日本が南洋全体を管轄するための南洋庁がありました。

その結果、パラオは激戦地の一つになりました。しかし現在は親日家の国です。国旗は日本と瓜二つで、日本に敬意を表して作ったとも言

われています。また公用語はパラオ語と英語ですが、未だに一部のお年寄りには日本語が通じず。また今もおパラオと日本はとても関係がよく、日本からパラオへの無償援助の額もアメリカの次に多いです。

私がパラオを活動場所に決めた理由は、4つあります。

一、パラオの治安が女性一人で行けるくらい良いこと

二、私が第二次世界大戦について興味があったこと

三、パラオの歴史を知り興味が湧いたこと

四、日本人女性兵士伝説があったこと

以上の四つです。

四の日本人女性兵士伝説というのは、「戦中のパラオにある芸者がおり、日本兵士と恋仲になった。戦争の最前線に行くことになった兵士は彼女を請出し、日本に返そうとしたが、彼女は兵士とともに最前線に行くことを決意し、男装し激戦地に行った。日本が負けアメリカ上陸後、丘の上に小さな死体が倒れていたのがアメリカ兵が確認すると、それは女性だった。アメリカ軍はその日本人女性の勇気に驚き、日本のジャンヌダルクと呼んだ」というものでした。この伝説が本当かを知りたいと思い、パラオで

活動することを決めました。またその芸者に敬意を表して、芸者の格好をすることにしました。

この活動で私は、3つの目標を立てました。

一、パラオに残る19個の戦跡を歩いて訪ねること

二、パラオにあった芸者街と料亭の跡地を探すこと

三、女性兵士の伝説が本当か調べること

以上の三つです。

まず、出発前の準備段階で日本のパラオ領事館に行き、パラオの旅行会社などへの電話やメールで現地の治安確認や、白粉をして芸者の格好で歩いて警察に捕まらないかを確認しました。そして私の活動に協力してくれる日系パラオ人も見つけ、合同部会でも企画が無事通り、部員に壮行会をしてもらい、パラオに向かいました。

初めてパラオに着いた時、予想以上にパラオの町の規模が小さく驚いた記憶があります。次の日、活動に協力してくれる日系パラオ人のフミコさんに会い、パラオの歴史や現在の状況、戦中のパラオについて教えてもらいました。そのなかでフミコさんが女性兵士伝説は実話ということと、その人が亡くなった場所を教えてくださいました。



パラオ、協力者のフミコさんと

この瞬間、目標の1つが達成されました。そこで、芸者が亡くなったと言われている場所をゴール地点にすることを決めました。

さらにパラオで3日間情報収集をして、活動開始です。

朝起きて白粉をして、日本髪のかつらを被り、浴衣を着て出発です。

フミコさんの民宿を活動拠点にし、大きな島々にかかる橋を渡り、いろいろな島に歩いて行き、日があるうちに民宿に帰るようにしまし

た。

まず初日は旧南洋庁、海軍司令塔跡、南洋神社跡、海軍墓地、岩山湾に向かいました。途中雨が降り、野犬に追いかけられていたところ、1人のパラオ人男性が助けてくれました。そのうえ、なぜか無料で案内役を買って出てくれました。

平日なのに仕事は？と疑問もありましたが、一緒に見て回ることになりました。一緒に戦跡を見ている途中、その人のお母さんが戦中、日本人と結婚をしていたこと、その日本人は終戦後消息不明で、唯一の情報は名前が「フジさん」であることを話してくれました。建物を見て戦争のすさまじさにも驚きましたが、それ以上にその人の話を聞いて戦争は過去の問題ではなく、今も続いている問題なのだと思います。

2日目に向かった場所は、アサヒ球場、日本人用プール跡地、海軍防空壕、芸者屋跡地、日本軍通信塔跡です。活動帰りに、パラオに住む日本人に声をかけられて、戦中戦後のパラオを調べている男性を紹介してもらいました。その人は戦中にパラオに出征していた人で、戦中のパラオについて詳しく教えていただきました。またアメリカ軍が包囲している井戸に命がけで水を飲みに行ったこと、万歳突撃の前日に負傷

し動けなくなったことで命拾いしたことを聞き、写真も見せてくれました。日本かと見間違えうような戦前のパラオの町、銃弾を受けて死んだアメリカ兵士、日本人の死体の山などの写真です。そして最後に女性兵士伝説についても教えていただきました。

その女性は日本から売られてパラオの高級な料亭まで来たこと、恋仲になった兵士は位が高かったこと、戦ったかどうかは不明だが、兵士のお世話を最前線ですしていたという、伝説の詳細をここで初めて知りました。

また、パラオの芸者全員が写っている写真を出して、この中にその女性がいると話してくれました。写真の中の誰なのかを特定しようとして、写っている他の人に連絡を取ったのですが、日本で家庭を持ち、芸者としての過去を知られたくないと言われ、特定することはできなかつたそうです。戦争の時代を生き抜いた人たちの強さに驚き、また、その人たちが守った日本に生まれ平和に生きていられることに心から感謝しなければならぬと思いました。

3日目は飛行機場跡、湊橋、製氷工場跡に行きました。この日には「変な格好をした日本人がいる」と島中に広まっていたようで、たくさ

んの人が話しかけてくれたことを覚えていました。パラオの女子高生と写真撮影もしました。地元の人とたくさん話すことができました。



パラオ、神社に続く参道



パラオ、ダウンタウン



パラオ、オレンジビーチ



パラオ、旧日本軍の飛行場

4日目は1日休息日を取りました。
5日目には、太平洋戦争で激戦地、また女性兵士が亡くなった場所でもあるペリリユー島に向かいました。船の出港を待つのに3時間と、船旅3時間で、6時間かかりペリリユー島に到着です。フミコさんの知り合いの人がドックまで迎えに来てくれました。そのまま戦跡めぐりに出かけました。この日は千人塚、妓楼跡地、ペリリユー平和記念塔、サウズドック、飛行場跡地、廃戦車、オレンジビーチを見て回りました。この中で特に感動したのが、オレンジビーチです。



パラオ、廃戦車

オレンジビーチでは、戦中たくさんアメリカ兵や日本兵が亡くなり、ビーチが死体で埋め尽くされたそうです。今日のオレンジビーチは美しく、戦争などなかったかのように静かでした。また、オレンジビーチの名前の由来にもなっている、海や空など見えるもの全てがオレンジになるサンセットは、息をのむほど奇麗でした。その夜は日系人に、いろいろお話を伺うことができました。私は前から疑問だった、「なぜパラオ人は日本に占領されていたのにも関わらず、親日家が多いのか」を尋ねました。その答えは、「パラオをしつかり統治していたことと戦中にパラオ人の犠牲者を出さなかったこと」とおっしゃっていました。まずパラオの統治のため、日本政府は道路などを整備し、産業を興しました。これが未だに、パラオの経済を支えています。占領中に虐殺や迫害、差別を行わず、パラオ人と一緒になって働いていたそうです。また、開戦後は、パラオ人を全員疎開させ日本人だけで戦ったことで、パラオ人の死者が出ませんでした。この話を聞いて、私はとても驚きました。戦中の日本の政策は悪いものばかりだと、思っていたからです。日本が行った戦争を肯定するわけではありませんが、パラオのケースのように日本人が行った良い側面も

もっと広めるべきだと思いました。

最終日はペリリユー博物館、海軍司令塔、パラオ小学校跡、大砲跡、ペリリユー神社、防空壕、日本人のお墓、千人壕の内部、そして女性兵士伝説の芸者さんが死んだとされているペリリユー島の丘の上に行きました。

まず朝向かったのは、ペリリユー博物館です。

ここは博物館と言われていますが、遺留品を並べてあるだけです。しかも建物は戦前に日本が建て、戦中には爆撃を受けたので、壁は穴だらけです。この博物館は常に施錠されているので、入場したい場合は島の役場に行つて、公務員の人に鍵を開けてもらわないと入れません。ここで初めて、戦中のペリリユー島の写真を見ましたが、今のようなジャンルではなく、立派な軍事基地でした。他にも千人針や刀、本、手紙、日の丸が置いてあり、戦争の凄まじさをじかに見ることができました。海軍司令塔は廃墟ですが、台所やお風呂の跡があり生活感を感じました。パラオ小学校跡は、戦前立派な校舎でしたが、今は一部の壁があるだけです。大砲跡は、今もなお綺麗に残っており、そこから海を見下ろすことができました。ペリリユー神社は、戦前は神様や天皇を拜むためにありましたが焼失

し、現在は亡くなった日本人兵の鎮魂のために再建されています。これらを通り過ぎ、ペリリユー島の丘の頂上に行く途中には、たくさんの方壕がありました。この防空壕は丘の中に張り巡らされており、旧日本軍の奇襲作戦に使われていたものです。アメリカ軍に大きな被害を与えることができたので、硫黄島でもこの防空壕の戦略が使われました。ペリリユー島の防空壕の多くは、戦中にアメリカ軍に火炎放射機で焼かれ、埋められているので、今なお防空壕内には遺体や遺留品がまだ眠っています。日本からの使節団が訪れ、それらを回収しているそうです。しかし、近年パラオ政府は観光資源が減るとのことで、あまり許可をしなくなった為、難航しているそうです。千人壕もまたペリリユー島の防空壕の1つで、この中で千人もの日本人が暮らしていたといわれるくらい大きいものです。伝説の芸者もここで生活していたと言われています。これらの防空壕を過ぎると、最後に芸者が亡くなったとされている丘に出ます。見晴らし、風通しもとてもよく、今までの疲れがすべてなくなるようでした。丘の上で手を合せ、活動が終了しました。



パラオ、千人壕



パラオ、ゴール地点 (芸者が亡くなった場所)

以上が今まで私が行った活動です。この経験から私が学び、みなさんに伝えたいことが4つあります。

1つ目は、目標に向かって頑張ることの大切さです。活動計画と目標を立て、成功させるために頑張る。活動に行くためにも、アルバイトや授業も頑張る。その結果、活動に行く前には、すでに疲れています。やっとのことで始まった活動では、常に予期せぬハプニングに見舞われ、顔面蒼白になることがしょっちゅうあります。

また炎天下を歩き続けるなど、本当に辛い時には、「自分は何をしているのだろうか」と思うこともあります。しかし、苦労すればするほど、活動の目標を達成した時には、本当に嬉しいです。今までの苦労や嫌なことが、一瞬で吹き飛んでしまいます。自分で決めたことをやり遂げるといふことの大切さ、そのためには辛くても我慢して乗り越えることの大切さを、活動を通して学びました。

2つ目は、人との交流の大切さです。活動中、さまざまな街に行き、たくさんの人に出会いました。助けてもらうこともあれば、騙されることもあります。でもその経験の一つ一つが、自分に何かしらの影響を与えてくれました。その人々は私が日本で普通の生活を送っていたら、

決して会うことはなかったでしょう。また、これから先、めぐり合うこともないと思います。このような人々と、交流ができることは旅行の魅力だと思えます。特に活動中は田舎や辺鄙な町に行くので、日本人を珍しがって見に来る人がたくさんいました。最初は不審者扱いでしたが、一旦、仲良くなると本当に親切にしてくれます。この瞬間に、国や人種、言葉はまったく違いますが、みんな同じ人類なのだと感じます。

3つ目は、日本について知ることの大切さです。活動中、さまざまな外国人が、日本について尋ねる、またその人々が持っている日本の知識について話してくれます。その多くは私の知らないことで、返答に困りました。逆に外国人のほうが、日本についてよく知っているなど感じることもあります。自分は日本人であるにも関わらず、日本について答えられなかったことが、とても恥ずかしかったです。そして、自分が生まれ育った日本について、もつと知らなくてはならないと思いました。海外に出た際、私たちは個人でなく、日本人として見られます。また私たちが接した外国人は、私たちを通して日本へのイメージができます。日本に固執するわけではありませんが、日本について説明でき

ること、自分は日本の代表として行動することは海外では大切なことだと思います。

4つ目は、経験することの大切さです。活動での経験は自分の個性を高めてくれます。その個性は現在の自分の強みになっていると感じます。また、どんなにくだらなと思えるようなことでも、まずやってみる。そんなことが、これまで述べてきたようなたくさんの方の事を、自分に教えてくれました。これらの経験から得た知識は、日々の生活にも役立てることができると思えます。私はパラオや中国で学んだことを、大学の授業やレポートで活かすことができました。そして、これからも色々なことに応用していけると思います。

最後になりますが、国外、国内問わず旅行に行った際は何か一つでも、今までやったことない目標を立ててみてください。それがもう冒険です。「最低でも30人の外国人と話す！」など簡単な目標は、たくさんあります。大変かもしれませんが、実行してみてください。きっとその目標が、感動や事件を起こしてくれることでしょう。その経験が、旅行をさらに面白いものにして、たくさんの方の事を教えてくれると思います。是非冒険を楽しんでください！